第２章では、本学大学院で探り始めた造形テーマにもとづいて制作してきた作品を中心に論じていく。

**第二章　動きの表象**

**第一節　偏愛マップ**

偏愛マップとは、教育学者である斎藤　孝氏が紹介している自己分析やコミュニケーションに用いるメソッドの一つである。私はこれを本学修士１年時に、美術教育研究室の小松佳代子教授の授業を受講したときに知った。

この時の課題は、私自身の好きなもの、ことを５点選択し、それらにある共通点を導き出すことだった。

私は、まず興味のあるもの、好きなもの、ことを思いつく限り羅列した。そしてそれを並べ、より興味の強いものを選んでいった。ジャンルは食べ物から景色まで様々なものがあった。その中から選択したものが以下のものである。たとえばアンドリューワイエスの絵画、プロペラ、天気、スポーツカー、料理、迷路、椅子、建築物、工芸、ガラスなどだった。

ここで私が共通点として導き出したことは「気配」という言葉だった。

まず、アンドリューワイエスの絵は、とても緻密な具象絵画である。老人や女性など人物や草原や農家などを描いた風景画が多いが、その中で私は古びた農家の家屋や納屋を描いた作品に強く惹かれている。そこに描かれていることが、そこにしか存在しない時間と感じ、その時間の中にある人や空気、出来事の気配を感じるのである。ワイエスの人物画はよく知られているが、私はそれよりもむしろ風景や納屋など、人の描かれていない絵がとても印象に残っている。

また、絵画ではエゴン・シーレやクリムトの風景画にも心を惹かれている。彼らの絵画も人物の描写が一般的に知られているが、遠景やアパートなどを描いた風景には、そこに人の気配や次に到来する季節の気配を強く感じることができる。

プロペラは、風車や飛行機、船舶に使われている推進装置である。また風や水を受けてエネルギーを生み出し、またエネルギーを移動する力に変換する装置でもある。プロペラが停止している姿からは、それが動くことによって撹拌される周囲の様子が予見できる。しかし、それが動かされて起こることなのか、自らが動き起こすことなのかは予想できるものではない。プロペラが与えられたものの種類によってその能動性、受動性は決まるが、プロペラ単体にはどちらも含んだ気配が感じられる。

飛行機に取り付けられているのか、扇風機に取り付けられているのか、それがプロペラの性格を決めているが、プロペラだけを見ていると、両方の気配を感じ、動き出す気配を読み取ることができる。

天気は、言いかえると空の景色である。私は海のそばで育った。いつも目にしていたのは水平線と山がある空だったが、常に変化し続けるその景色は、おそらく一度も同じだったことはなかっただろう。

そしていつも空を見上げるときにはその後の天候を考えている。すなわち未来を感じようとしているのだ。五感を使って感じる温度や風、香り、光などで、天候の変化の気配を見つけようとしている。自身の身を雨などから守るという理由もあるが、四季を楽しむことと同じように、空を見て天候の変化の気配を感じること自体に興味を持っていた。

自動車は、乗り物のなかでも興味を持ち続けているものだ。その使用目的に応じて大きさや形、機能が変わり、人間の欲求に応えるための機械になっている。そのなかでも、移動する速さのみを追求したスポーツカーに強く興味を持っている。前に進むことだけに特化した形と機能は、スピード感を強く感じさせる。そして、エンジンが動くことで生まれる音と振動は、そこに溜められた力を感じ、動き出す気配を作り出している。

迷路は、見えない先、選択の連続である。それは希望と失望を感じるものだと考えている。その経験を作り出す装置として様々な時代や場所に存在している。これらは自分が未来に向かって行動することの意味を考えさせる。そこには選択する行為が続き、その結果は良いことなのか悪いことなのか、誰もわからない。我々は漠然とした気配を頼りに判断し、前に進んでいく。その時に持っているのは、希望でもあり失望でもある。

道具は人間の中身を表現しているものと考えている。なぜなら道具は人間が物体に用途を与え作りだしたものであり、それが生まれてから文明が発展した。そして動物と人間を分けたものであると言える。

道具に込められた用途は人間の知恵であり、それは人間を幸せに導くものであると同時に不幸をもたらす両義性のあるものである。その道具に感じる気配は、その道具に込められた人間の意図や時間を感じさせるものだ。

**第二節　動きの気配**

私が興味を感じる気配には、必ず動きを伴う。その動きを中心に、それ以前または以後の変化の気配が、何より重要なものだと偏愛マップから導き出された。

その中でも私は動きそうな形や動き始める瞬間、止まる瞬間を表した形が美しいと感じている。それらは緊張感と静寂が同居するもの、転がりそうなもの、飛びそうなものであり、〜そうなものはその先の未来を予想させる効果を持っている。これらは抽象的な姿でイメージされ、普段生活する中では具象的な物体ではないと考えている。また動く形は、動きの機構自体や動く物体そのものを表している。たとえばタイヤや飛行機、はさみといったものや、コイルやクランクなどである。

何かが動けば必ず変化がおこる。そして変化を目的としてそれらが動きだすことがほとんどである。

私は変化とそこに生まれる新しい未来を望んでいる。そのため変化するためには動く力が必要であり、その力が何であるのか知りたいと考えている。

そして私はこの興味と欲求を造形を通して探求したいと考えている。それを表現するためのモチーフは、動きとその気配をもつものになる。

**第三節　動勢**

主に絵画や彫刻における動勢や動きを指し、面や筆触、色彩等の処理による表現に動勢がある場合と、モチーフとなる人物や風景に動勢がある場合とに分けられる。

絵画においては画面内に描かれた線、面、形、色彩、肌理といった絵画の形式的要素の構成や配置によって、鑑賞者の視線を心理的に誘導させる方法を意味する。

なお、面の移動による二次元的なムーヴマン以外にも、静的な面の重なりにより生成する三次元的ムーヴマンや、立体的な量の空間構成による前景から奥への後退と奥から画面への復帰を示す円環的ムーヴマンなどがある。特に立体的な空間の奥行きによるムーヴマンは、遠近法や明暗法に従属することなく、空間の動勢が確保されうると、ポール・セザンヌの画面構成に関する手法の分析を『セザンヌの構図』（1943）で行なった画家アール・ローランは指摘している。なお、絵画や彫刻におけるムーヴマンについては、それら造形芸術が物質的条件により瞬間の表現に限定されるがゆえに、その「含蓄のある瞬間」において造形芸術と文学といった言語芸術を弁別し、18世紀のドイツを中心にヨアン・ヨアヒム・ヴィンケルマンと「ラオコオン論争」を起こしたゴットホルト・エフライム・レッシングが挙げられる。

また、そのような時間の問題は、一方で1909年のミラノでマリネッティらによる未来派では機械的な速度が重視され、継起的時間の動勢の表現が絵画や彫刻の主題となった。

第一項　力感

力感がある形、自ら動こうとしている形は不安定で儚く危うい雰囲気を持っている。弾ける様を見せる形や、揺れ動く様が見える形が動きのある形

1. 素材の特性　ガラスが持つ動勢の表現

ガラスを用いて動勢を表現するとき、流動性を利用することが多い。液体に現れる素材の表情には常に動きを伴ったものが多いが、ガラスはその特徴を残したまま常温固体化できるのである。それはガラス転移点を持つためで、粘度が緩やかに変化する温度帯が、液体の表情を残したまま固まっていくためである。

**第四節　エネルギー**

動きを生み出すエネルギーには、運動エネルギー、静止エネルギー、ポテンシャルエネルギーがある。

運動エネルギーは運動することで増えるエネルギー、または運動している物体が持っているエネルギーのことである。

静止エネルギーは質量に相当するエネルギーで、アインシュタインが発見した特殊相対性理論の中で見出されたエネルギーのことである。物質は、形のないエネルギーが質量という姿になったものという考え方であり、静止している物質にもエネルギーは存在しているということを示している。

ポテンシャルエネルギーとは位置エネルギーとも言い、たとえばその物体が高い位置にあることで、そのエネルギーは蓄えられているという考え方である。

エネルギーは動きを生み出すものだと考えているが、それは外部からの者だけだと考えていた。しかし物理の世界では、その物体自体にすでにエネルギーが存在していると考えられている。また、その物体が置かれている場を変えることにより、その物体が動く可能性を示すエネルギー量が変化するという。

私が表現しようとしている気配は、止まっているもの、形に満ちている静止エネルギーやポテンシャルエネルギーと同じ意味を持つものなのである。動きの中に現れているエネルギーとは違う表現になるのは、一般的にエネルギーは何かを動かしているものとして認識され、そのエネルギーは動いているものに見えるからだ。

**第五節　動きを力に変えるもの　モチーフ**

プロペラ、ゼンマイは回転の造形

螺旋のかたちをガラスで作る

ガラスで作るには、キャスト、接着、溶着

セルベンキャストの利点、ペーパーキャストの利点、アルミ原型の利点を見極めることでどんな作り方にするか決まる。

また、どんな螺旋なのか、裏テーマ？を設定することで空気を作る。

色や質感、リズムで何を出すか。

loopholeは暗い世界。

どんな色でも螺旋や渦巻は美しい。

大きく儚く、奥深い、痕跡のような

モーターのような、円柱が寝た感じ

カンタル、金属を使うことで構造の補強をする。厚みを部分で持たせて強さを作る。

力を変えるもの　風車　自転車　ギヤ　エンジン

強さを軽やかさに　嫌を笑に

変化させること　光が電気に　ガソリンがスピードに

変える

変わる

消費と結果

変えられないもの

変わらないもの

第一項　バネ

力を溜めるもの　溜めた力を解放するもの　弾力性は金属からくる　ガラスには弾力

イメージがない　破壊の予感を与える　気配を持つ

螺旋 生命の根源、永遠を感じる時間、神、信仰心、フラクタル幾何学

道具には人の気配を感じる。人が使うもの、人が必要とするものには、人に合わせていく形と機能が見える。それが気配をまとうことになるのか。

道具は人を動かす。また、人は道具を使うことで動かねばならない。

動く為には力を使う。たくさん動く為にはたくさんの力を使う。

人は一人分の力しか持っていない。大きな力を出せるのは短い時間。

力を貯める、力が溜まる。

力をかけたとき、その力はそこに溜まる。ばね、ぜんまい、

人の力のぶんだけ、たまる。

人の力を変えて、人の能力以上のことを行うようになる。

ガラスに力を溜めることはできるだろうか。

ガラスが動いているような形を作りたい。

力感がある形、自ら動こうとしている形は不安定で儚く危うい雰囲気を持っている。

弾ける様を見せる形や、揺れ動く様が見える形が動きのある形

第二項　プロペラ

プロペラ　風を受けて動く、動いて風を作る　まわる形　風を作り、風を求める

プロペラの意味

なぜプロペラを作るのか。形に動きを感じるから。動きを与える、動きを受ける、両方の性質をもつかたち。動きの形をつくりたい。テーマは『動き」モチーフがプロペラ動くのは、空間。動く空気感を形に。

セルベンを使ったキルンリキャストは、ガラスがキルンの中で再び動くことで新しい見え方を作る。技法や表現において使ってみたいやり方。

第三項　迷路

なぜ迷路に惹かれるのか　人が集まると関係が生まれる。関係をコントロールするためには、関係を繋げたり断ち切ったり できる術を考え、生み出す。 人の空間を作り出すもの、壁。壁を立ててはじめて人の空間を意識する。  は厚かったり薄かったり、固定されたり動かせたり、見えたり見えなかったり、様々なもの。 物理的な壁、意識的な壁、文化的な壁。それぞれが関係を分かつ意味が大きいが、それ以外の意味として、守るため、導くためなどの意味を持つ 壁を立てると空間が分けられる。内側と外側が成立する。 壁を立てると、動きを操作できる。人の流れ、水の流れ、空気の流れ 壁が長く続くと道になる 道は移動するものたちで作られる。人は移動する生き物だから、道を作る。

道には人の流れる動きがある。 人が動くには理由がある。生き物が動くにも理由がある。 迷路　迷いや不安を感じる　入口と出口がある　正解がある　全体を俯瞰している

迷路に似たもの

迷路から感じること　美しい 迷い 時間 狭い 道 壁 街 不安 情報 空 動き 人 気配

都市のカタチ 川 道 電車 高層ビル 欲しい情報  欲望 見えない壁  人がいないとないもの

**第六節　動きを止める構造**

第一項 構造体

固定する方法　金属ピン　塊　組み立てる　建築

1. 支える形

ガラスは自重で崩壊する　自重を支える構造が必要だが、それは動きを止める構造になる。動きを止める構造と動く形とはバランスが取れていなければ造形が成立しない　バネには金属ピンを使った　プロペラ